

### 1 国語科で願う豊かな学びの姿

本学校園国語科では、ことばの学習、特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切に、よりよい言語生活や社会生活を送ろうとすることのできる子どもの姿を目指している。それを踏まえ、「豊かな学びの姿」を次のような姿と考えている。

- 仲間とともに読む活動を行う中で、互いの読みを交流し合うことによって読みを深める姿。
- 読みを進めていく中で、一つの読み方を獲得した際に、それを共通言語化するなどして一般化し、他の場面でも応用可能なものにしていく姿。
- 自分たちが獲得した読み方の有用性を実感し、次に読むときに進んで使おうとする姿。

つまりは、一つの文章を読むに当たり、互いの考えを交流させる学び合いによってそこから獲得すべき読み方を得て、それを一般化し、他の読みへ応用させるという姿である。これらは一つ一つの姿が別々に現れるのではなく、一連の流れを形成しており、螺旋的に高まっていく姿であると考えられる。

### 2 国語科における思考力・判断力・表現力とは

国語科で研究の中心に据えている「読むこと」の学習は「話すこと（・聞くこと）」、「書くこと」という表現活動と切り離すことができない。表現を伴う学び合いの場で、他の学習者の「読み」と照らし合わせながら、自己の「読み」を確立させることが、思考力・判断力・表現力を育てることにつながる考えた。こうした力が育つことによって、上記の豊かな学びの姿が実現できると考える。国語科で育てたい思考力・判断力・表現力を、本学校園の発達段階別そして国語の領域別に設定したのが以下の表である。

領域／ 発達段階	初等部前期	初等部後期	中等部
読むこと	物語を中心に、音読したり他の意見を聞いたりしながら、登場人物の様子や話の展開をとらえる力。	文章の構成や文章に表れているものの見方・考え方をとらえ、事実と意見とを区別したり、他者の考えを自分のそれと比べたりする力。	文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けたり、批評的な視点をもったりする力。
話すこと・ 聞くこと	身近なことや経験したこと、関心のあることについて、進んで話したり、共感的に聞いたりする力。	相手や目的に応じて、事実と意見とを明確にして伝えたり、他者の考えを自分と比べながら聞いたりする力。	相手や目的に応じて、客観的な視点を踏まえながら伝えたり、他者の考えを批評したりしながら聞く力。
書くこと	身近なことや経験したこと、関心のあることについて順序立てて書く力。	相手や目的に応じて、事実と意見とを区別したり、表現の効果を考えたりしながら書く力。	相手や目的に応じて、構成を考えたり、客観的な視点を交えたりしながら、効果的な表現を考えて書く力。

主人公に寄り添って読んだり、自分の身近に起きたことを話したり書いたりする主観的な視点を大切に初等部前期を起点として、客観的な視点から自分や他者が表現したものを批評することができる中学生へと、読みの力を段階的、系統的に育てていくことが、それぞれの段階における豊かな学びを表出させるであろう。

こうした力の育ちを教師が的確にとらえることが、より確かな育ちへとつながることは言うまでもない。各段階における学習活動では、上記の力をもとに明確なねらいを設定する。これらが子どもたちのものになり、一般化されて次に使う力へと応用可能となる。そのために、読み方が個々の中で形成される過程において、段階的に評価規準を細かく設定し、達成状況を把握するための評価基準を設け、指導に生かすようにしていきたい。このように明確なねらいの設定と的確な子どもの学びのとらえによって、上記の力が段階的、系統的に子どもたちに身に付くようにしていきたい。

### 3 思考力・判断力・表現力を育成するために

#### (1) 学びをいかす

学びをいかすことについて、国語科では、「子どもがこれまでの学習で習得した様々な読み方を活用しながら、より多面的に、あるいはより深く作品の魅力に迫ろうとする姿」ととらえる。子どもが意欲的に読書生活を送るためには、「読むこと」の学習を通して様々な読み方を身に付ける必要がある。読みの視点が広がることで、子どもは作品に応じて、習得した読みの要素を自ら組み合わせながら読み、作品の魅力に迫っていくことができるであろう。

子どもの「読むこと」についての発達段階ごとの特性を次のように設定し、単元を構成したり、子どもの学びを見取ったりするための指標とする。

初等部前期	物語世界に同化したり、没入したりして、文章に自己がひたる時期。
初等部後期	登場人物の内面に共感したり、情景描写など、物語を構成する周辺の要素に注目したりすることができる時期。
中 等 部	登場人物の人物像を客観的にとらえたり、周辺の要素と関係付けたりしながら、物語世界を俯瞰的に見ることができる時期。

初等部前期では物語の楽しさを味わえるような単元を工夫し、初等部後期では読みの視点を広げ、中等部では批評的な読みを身に付けさせることに主眼を置いて単元を構成する。この時には、2で述べたようにねらいの明確な単元を設定する。その際、文学的文章を読むときの視点として学習指導要領に示されている次の点にも留意したい。

- ・登場人物の行動描写
- ・登場人物の性格や心情の変化
- ・情景描写
- ・登場人物の相互関係
- ・場面の展開
- ・登場人物の言動の意味
- ・物語の設定の仕方

これらの中から習得する読みの力を明確にした単元づくりをすることで、教師にも子どもにもねらいがはっきり意識できる学習を組み立てていく。子どもの中でその意識ができたときにこそ、次の場面でも応用可能なものとして根付いていく。その営みを一般化と称する。そして、一般化されたことが次の学びでいかすことのできるものとして一人一人の子どもに根付いていくような単元を、更に設定していく。

#### (2) 学び合い

読みを進める中で獲得した読み方の一般化は、共通言語化することによって個々が一般化したものが他者と共有可能となる。すでに一般化が行われた子どもには他者の考えに触れて深まりを期待でき、一般化がうまくいかない子どもには手助けとなる。こうして個々が一般化したものを出し合い、その是非を検討し、自分たちの中に根付いたことを振り返り、さらに次の学びで高めていく、というサイクルを国語科における学び合いの在り方として大切にしていきたい。こうした学び合いは、小学校低学年までは教師が子ども同士の学びを確実につないでいき、中・高学年では様々なかかわり合いを意図的に仕組んで経験を積めるようにして、中学校ではそれまでの経験をいかして、学び合いが成立するようなペア活動や小集団学習の位置付けと工夫を意識して学習活動を展開したい。

学び合いの形態については、学習展開の中でのペア・小集団活動と学級全体の学び合いの関連・位置付けを明確にする。これまでは学級全体の学び合いの前提としてペア・小集団学習を位置付けていたが、全体の学び合いの後にペア・小集団学習を位置付けるなど、していきたい。

#### (3) 教師のはたらきかけ

これまでの研究で、子どもの発言を掘り下げるはたらきかけの重要性がはっきりしてきた。掘り下げることを通して子どもの思考を深め、一つの読みに陥らないよう常に子ども全体へ広げるようにしたい。また、これまでの実践で、「根拠（記述・事実がベース）」の出し合いは学び合いにつながりにくく、「理由（根拠をもとに自分の言葉で表現）」へと掘り下げることで、子どもの学び合いが活性化することも明らかになってきた。さらに、子どもの使う日常語がキーワードとなって読みの広がりや深まりが生まれることも多い。学び合いの中で子どもに共通認識化させるための言葉の拾い方や広げ方を「共通言語化」というはたらきかけとして重視する。この共通言語化が機能してこそ、読みの一般化がより子どもたちの中に根付いていくことが期待できる。

（文責 川井 史生）

#### 【参考文献等】

- ・安居總子『授業づくりの構造』大修館書店、1996
- ・横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編『思考力・判断力・表現力を育成する評価と指導』学事出版、2011